

# 社説

## 血液製剤もあなたの献血で

病状やけがをした時、輸血が行われる。昔は採血した血液をそのまま患者の体内に送り込んでいた。今は必要に応じて血液の成分を分けて使う。

血液(けっしやう)、赤血球、血小板。これらは輸血でも使われるが、薬としても有効なことがわかってきた。血液からは、血友病に欠かせない血液凝固因子製剤、やけどに効果のあるアルブミン製剤、感染症に効く免疫グロブリン製剤が作られる。これらを血液分画製剤と呼んでいる。

輸血用の血液は国内の献血でまかなっている。が、血液分画製剤まで手が回らない。九〇%以上はアメリカの売血などに依存している。汚染された血液凝固因子製剤で千人を超すエイズの感染被害を招き、また肝炎もまた新しい。

この中には薬用成分の半額といふものもある。この差益が製剤に転換せざるを得ない。儲けの抑制には、薬価も負担を要する。

次に、原料となる血液の確保のため、献血を増やさなくてはならない。血液凝固因子製剤の確保は、新しい年間の五、六十年の血液が要する。六十二年度の献血は、大分県血液供給量は十二万リットル、献血の倍増作戦が必要だ。

このために、出張採血の窓口を大幅に増やし、若い人たちが献血しやすい場を設け、しなくてはならない。職場や学校の協力も大切だ。みんなが力をあわせて、献血の現状は、言わば「献血が主役だが、少数派の

四百CC採血を増やしていく方法もある。また、血液だけを採取する「成分採血」を増やしてはならない。通常の四百CC採血は、血液は百六十CCしか採れないが、この方法だと、まるまる四百CCの血液が採れる。

また、この成分採血は赤血球などを体内に戻すので、一時間近くかかる。時間を短縮する技術開発も必要だろう。

血液を臓器の一部と考えるならば、これを力不足を補うべきではない。まして外国からの買血は一日も早くやめよう。ただ、公営化には非効率やムダな経費がかかる。主体となる日本の責任は重いといわなければならない。

## 「第二次交通戦争」を阻止しよう

全国で交通事故による死者が、九月に入ると七千人を突破した。この数字は、十三年ぶりに犠牲者が一万人を超えた昨年より、さらに多い。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

現在、世界的な供給過剰から、安い血液が推計されている。この十五年間最も死者が多かった昭和五十年の記録を、一回の心配

利用中の犠牲者が、半分以上が高齢者である。昭和四十五年の「第二次交通戦争」の犠牲者、千供たちの犠牲者が目立ったが、いまでは、お年寄りが交通戦争の犠牲者といえる。

「第二次交通戦争」は、なせ死に事故が頻発したのか。その背景には、クルマ社会が広がっているという事実がある。格別、合していきなさい。

一番の原因は、何となく、高齢者が支えられて、人と物の動きが活発化していることだ。免許人口、車両台数、交通総量が飛躍的に増大していることが、それを証明している。

また、四輪車と二輪車が一緒な道を走り回ると、激しい道路環境の中で、クルマ社会の一員として動かなければならない高齢者が、海を渡る切れないという現状がある。

一つは、高齢者が急増している。高齢者の人口が増えているというだけでも、犠牲者の増え方は想像を超えている。

昨年より一五%も増えている犠牲者、油断、恐れなどによるものだろうが、この効果的な救命活動は、必死で行った。

今年の「交通安全白書」は、「第二次交通戦争」の兆しを告げた。しかし、こんな「戦争」は何としても避けたい。

暴走族の無謀運転が相変わらず激しいことを考えれば、警察当局による取り締まりの強化は、決して緩むべきではない。警察庁は、このほど、暴走族の被害対策を進めるために、整備不良車や規制以上の騒音を発生させている、空吹かしをしたといった場合の違反点数や反則金を引き上げると発表した。その効果を期待したい。

また道路環境の整備も必要だ。高齢者やマイカーのことも考え、道路標識をもっと見やすく、分かりやすく、信頼性の位置も改善する余地がある。

だが、それ以上に大切なのは、クルマ社会に参加している一人ひとりが、道路交通に関する安全知識をしっかりと身につけ、実行することである。

きょう(十一日)から、全国で「高齢者交通安全週間」が始まる。これを機会に、死者のカーブを下向きしたい。